



人は必ず死ぬのだが、寿命いっぱい生きることが大切である。そして最期まで、人としての尊厳を失わず、人としての生き甲斐を持って生き抜くことが必要である。

どんな怪我や病気でも、私たちが医者にかかるのは、永久に死なないためにではなく、寿命いっぱい生き抜くためにである。

何科を標榜する医者であっても、医者はそのことを専門に学んできた命の専門家である。私はそう思って医者を基本的に信頼している。

体や命に不安を感じているとき、現代医学では治せる道がなくても、医者が不安や悲しみを受けとめてくれて、生きることを応援してくれるだけで患者は安心できるのである。そのことに自信を持って患者と向き合っていたきたい。

第二は、医者と家族の関わりである。

これはとくに認知症の場合は特別に重要である。その患者さえ回復すれば一件落着という病気も多いが、認知症に限っては患者が生きてゆくためには必ず家族の支えが必要になる。とくに高齢の患者の場合は、家族は常に「死」と向き合っているといえる。まさに未知の体験に対峙しているのである。

命の専門家が、家族に病気の知識を教え、予後の見通しを示唆してくれるならば、これほど心強いことはない。さらに、医療上のことではないが、介護保険など制度の利用や「家族の会」など当事者組織の存在を教えることは、家族が介護への勇気をわかせることへの大きな支援となる。

第三は、医者と社会の関わりである。

認知症になっても希望を失わず、家族が医者を支えられ仲間と交流して介護が続けられるためには、社会のありようが重大な影響を与える。

30年前、私は、社会的制度が皆無のためやむを得ず自分で家政婦を雇わなければならなかった。当時は“座敷牢”という言葉も平気で横行していた。だから私たちは、「介護の社会化」を求めてきた。

社会の制度が整えば、患者も家族も安心して生きることができる。それは医療、福祉面だけでなく、年金や雇用、子育てや住宅問題など暮らしにまつわるすべての制度である。

「人命尊重」を旨とする医者的心をほんとうに実現させたいと願うなら、患者と家族を取り巻く社会をよくするために一肌も二肌も脱いでいただきたい。

「家族の会」は一貫して「ぼけても安心して暮らせる社会を」と訴えてきた。私たちの願いの実現のためにも、病を見て人を見る、人を見て家族を見る、家族を見て社会を見る、そんな医者が町中にあふれてほしい。